

米1月FOMC、4会合ぶりに政策金利の据え置きを決定

<結果概要>

・FRB(米連邦準備制度理事会)は、1月FOMC(米連邦公開市場委員会)において4会合ぶりに政策金利を据え置き、3.50%~3.75%とすることを決定した。今回の決定は、投票権を持つメンバー12名のうち10名が賛成し、従来より利下げに積極的なスタンスを示しているミラン理事と、次期FRB議長候補の一人とされているウォラー理事が0.25%の利下げを求めて反対票を投じた。

・声明文における経済活動の認識については、「堅調なペースで拡大している」と、前回12月会合での「緩やかなペースで拡大している」から上方修正されたほか、失業率についても「落ち着き兆しがある」として、雇用の下振れリスクについての記述が削除された。

<決定内容>

	前回結果	市場予想	今回結果
政策金利(%)	3.50-3.75	3.50-3.75	3.50-3.75

<パウエル議長会見要旨>

・パウエル議長は、今回の政策金利据え置きについて、昨年3回利下げを実施したことで、今後は経済データが示す方向性に応じて柔軟に対応できる政策余地が確保されたとの認識を示した。

・今後の政策決定に関しては、現時点の政策金利の水準を「想定される中立レンジの上限にある」とするなかで、利上げはベースシナリオではなく、「関税効果のピークが見られれば、政策の緩和が可能」と今後のデータやリスクのバランスに基づいて検討するとした。

・また、記者会見ではトランプ政権による政治的な圧力に関する質問もみられたが、パウエル議長はこうした問題に関する質問への回答は避け、「FRBが独立性を失うとは思わない」と、FRBの独立性についての重要性を強調した。

<相場の反応>

政策金利見通し

FOMCの結果がサプライズの少ないものとなったことで、FF金利先物市場における政策金利見通しに大きな変化はなく、2026年度末は3.160%となっている。

ドル/円

ドル/円は、FOMCの結果についての影響は限られたものの、ベッセント財務長官が米国の為替介入について「絶対にしていない」と答え、「健全な政策をとれば資金が流入する。米貿易赤字は縮小しており、時間の経過とともにいずれ、ドルの更なる上昇につながるはずだ」と、米経済の先行きに対する自信を示したことでドル買い円売りが優勢となり、一時154円05銭まで上昇した。

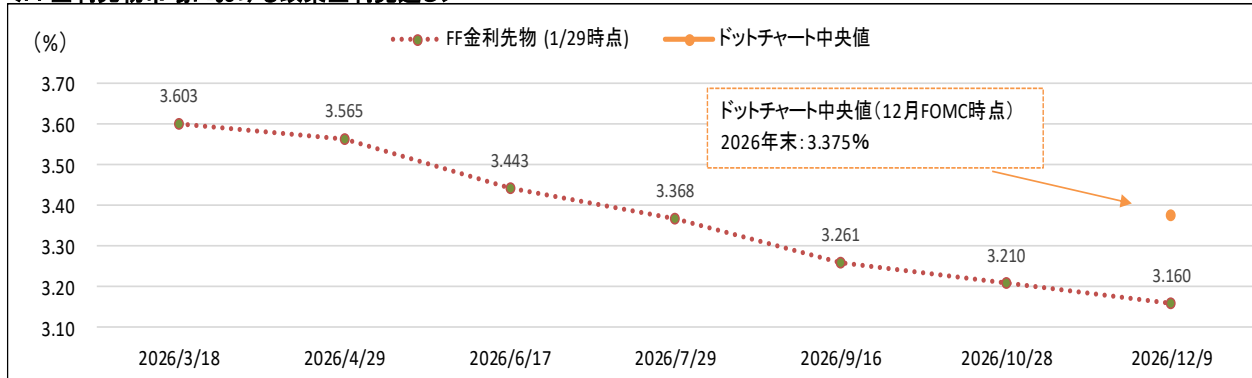
米国10年金利

米国金利は、政策金利の据え置きが公表され、声明文で経済活動の評価を示す表現が上方修正されたことで米国10年金利は一時4.267%まで上昇したが、その後はパウエル議長が関税の影響がピークを迎えインフレが落ち着いた状況となれば利下げの実施が可能であるとの見方を示したことで、前日終値付近まで下落するなど方向感に乏しい展開となった。

米国株式市場

日欧半導体関連企業の好決算を受けテクノロジー株主導で上昇し、S&P500指数は節目の7,000ポイントを突破する場面もみられたものの、FOMCの結果が概ね市場の想定通りであったなか、相場の方向感には出にくく、3指数ともに前日終値付近での推移に留まった。

<FF金利先物市場における政策金利見通し>



<市場動向>

	1/28 終値	1/27 終値	前日比
ドル/円相場(円)	153.41	152.21	1.20
ダウ平均株価(ドル)	49,015.60	49,003.41	12.19
S&P500指数(ポイント)	6,978.03	6,978.60	▲ 0.57
NASDAQ総合指数(ポイント)	23,857.45	23,817.10	40.35
米国2年金利(%)	3.571	3.573	▲ 0.002
米国10年金利(%)	4.243	4.243	0.000

FF(フェデラル・ファンド)金利とは

●FF金利とは米国の銀行間市場で資金貸借をする際に適用される金利を指し、日本における無担保コール翌日物金利に相当する。FF金利は米国において政策金利として用いられている。

●FF金利先物とは、FF金利を原資産として将来のFF金利を予約する取引であり、投資家の予想が反映されることから、FF金利先物の水準を見ることで将来のFF金利の予測を観測することができる。

※本資料は情報提供を目的として作成した参考資料であり、投資勧誘を目的としたものではありません。本資料の内容は発行日現在のものであり、将来予告なく変更されることもあります。本資料は信頼できると考えられるデータに基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。本資料は証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではなく、将来の市場環境等を保証するものではありません。